

昭和二〇年の終戦をさかいに、日本の図書館は大きく変わりました。今回は、その前後に出版された資料やその後の研究資料を展示しています。様変わりの様子をご覧ください。

戦前の図書館は、思想善導機関としての役割を担っていました。ですので、図書館が県民向けに発行した目録は、「国民精神総動員関係図書目録」や「経済戦下必読図書目録」です。その中に掲載されている資料の一部が、「国民精神総動員実施概要」や「戦時経済の実相」などです。

国民が知りえる情報も制限されていました。内務省が指定した発禁図書には、長与善郎の「青銅の基督」も含まれていました。また、陸軍の発行の五万分の一地図には、佐世保市の部分がきれいに除外されていました。

終戦後、これまでと異なる思想や文化を享受することになりました。教科書は、文部省の指示で墨が塗られました。

今度は、占領軍が発禁図書を指定しました。身の周りからこれまで親しんだ本が無くなった代わりに、アメリカから図書館へ本の寄贈がありました。また、CIEの図書館も設立されました。

図書館の総合的な全国組織である「日本図書館協会」は、戦前の図書館の歴史を反省し、一九五四年（昭和二九年）に「図書館の自由に関する宣言」を取り決め、「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することをもっとも重要な任務とする」ことを確認しました。

県立長崎図書館も、原爆の被害を受けながらも新しい図書館へと生まれ変わっていく様子が、当時の館報に記されています。

ところで、今も話題となるその年のベストセラー。

昭和一九年は、もっとも人気があった家庭小説 獅子文六著「おばあさん」。

戦後ベストセラー第一号は、満州事変から敗戦までの秘められた日本の裏面史「旋風二十年」です。

県立長崎図書館創立100周年記念企画 昭和20年の本棚



戦前、戦後の
地図の対比

この部分が空白になっている

戦後、墨を塗られた
教科書

※戦前・戦後のベストセラー本も展示しています。